

華生太鼓の音三階へ伝わりく納涼祭の始まるらしき

どんな時にも前向きに生きて来れたと父母夫の生きざま思う  
野げしの実風に吹かれて漂えり畑にはげみし嫗はみえず  
ラジオよりの緯度と経度を地図上に確かめたりき若かりし父  
二日ほど雨降りつづき垣の薔薇赤芽やはらかく秋ふかみゆく  
大木の根元に咲きし山茶花を今朝も撫でゆく秋風太郎  
七万の人も結束は広場埋め翁長氏偲ぶと声あぐる民衆

「今すこし生きて己の無惨見む」ふみ子の心情われの追憶 申城ふみ子  
突然に暮らしの変わる日々の中互いに通じぬことの多きよ  
二時起きで二ラを仕分ける母米寿話す相手がいるから元気  
生き物の声かと歎の騒ぐなり終日この身穏やかならず  
長病みの兄は甥等の只管な介護を受けて淨土に向かう

花力ナンナこの寒空に凜として咲ける強さにちからを貰う  
首輪つけ迷いきし猫おとなしく我が家に住みて生を終えたり  
年のつく田原安けいちめんの稻株しらじら静もりにけり  
野菜園入れば仲々出られない杉菜カタビラびつしり生えて  
繁藤は根曳峠を越えて行く雪降る里よ思い出の町  
かじかんだ手で畑野菜箱につめ文に添へたり土佐の陽ざしも  
デイの日に吾の不注意でかすり傷先生に詫びられ肝に銘する  
蛇行する大河眠れる龍に似るやがて目覚めて飛翔するやも  
まばたきをするたび胸に幾枚も飾られてゆく雪景色あり  
中山間道行く人の足とめて見事に咲けるコスモスの園

岡崎 桜雲 選

# 風の流れ

【短歌】

踏ん張りてうねりに合わせ立ちて居る室戸灯台上下に揺れる

ほのぼのと明けゆく空に初日の出健やかなれよ光りもあれと

防災の訓練ありと集い行く老いも若きも愛携えて

何時ものように何時もの部屋に目覚めたりこの一年も斯くあれかしと

湯気ゆらり白きカップに南瓜のステップわが畑作の恵み味はふ

「まあきれい」車窓より見る紅葉に拍手拍手でべふ峠をゆく

うす紅の海棠の花ふと見れば小雨にぬれて彩り深し

時雨ふる夕べの庭の一角はほのか明るし石蕗の花

豊かなる髪とは実は言へなくて前の日洗へば少しふくらむ

物忘れもとへ戻りて思ひだす歳には勝てぬと先人の声

濃き薄き黄金べに色「大荒」の全山紅葉息のみて佇つ

大豆むす湯氣の路地へとあふれるて味噌つくる人らの声もひびかふ

同窓の女子会開けて語りあひ又の機会を互ひに約す

時雨ふる夕べの庭の一角はほのか明るし石蕗の花

豊かなる髪とは実は言へなくて前の日洗へば少しふくらむ